

[エッセイ]

## 文部大臣のいた刑務所

高野 光 司

### (一) 序 章

ごく初期の東京大学では、日本近代内科学の父 Erwin von Bälz も生理学を講じていたこともあるが、最初の日本人の生理学教授は大沢謙二だった。

1986年ゲッティンゲン大学生理学研究所(教室)留学の先輩でもある望月政二先生が山形で日本生理学会を開催された折、東大名誉教授 若林勲先生にもお目にかかった。若林先生は私が千葉大学生理学教室の大学院2年生の頃だったか、1-2週間千葉に宿泊して連日実験をされた。午前中に私が助手で本間助教授(当時)が手術(laminectomy)をされる。本間先生は留学先のノーベル研究所でもずば抜けた手術の名手だった。その動物で午後から、若林先生は本間先生が誘導した単一神経線維発射を使って、二人の助手とともに実験をなさる。オッシロスコープからの記録の大部分は80mm幅位の紙ロール・フィルムに撮影される。夜の九時過ぎ、実験が終わった時には、フィルムは30-50メートルの長さにもなる。現像係は私である。自動現像器などという便利なものはない。まず大量の現像液と定着液をつくる。何十メートルの紙の帯を次から次に現像液にひたし、頃合を見て水洗して定着液に、定着が終わると水洗である。定着が終わるまでの作業はむろん全部暗室内である。最後の水洗には時間をかけたので(普段なら翌朝まで弱い水流に浸しておくのだが)、全部の作業が完了するのは夜半を過ぎた。それを半身、いや全身ずぶぬれになって、生理学教室の端から端まで廊下を横断して張ったザイルに二往復くらい洗濯物よろしく引っ掛け

る。終わって猪鼻山の麓の下宿で死んだように眠った。

早朝起きだして、廊下で干して乾いた紙フィルムを巻いて数巻につくり、若林先生の(仮の)机の上に並べておく。朝飯をかき込むと、本間助教授が出勤してきて手術が始まる。もちろん私には、動物小屋から持ってきてもらったネコを麻酔し、手術野の毛をそいだりする準備がある。その間に早々と朝食を終わらせた若林先生は、午前中、昨日のデータを見て、必要があれば今日の実験の計画をされる。そんな日々の後、二人の助手は揃ってダウンしてしまったとのことだった。

その若林先生から山形の学会場で、大沢健二先生のドイツでの論文を手に入れるようにとの依頼があった。

ゲッティンゲンに戻ってから、研究所の古いジャーナルからだったか、大学図書館の古文書部だったか、どこかから手に入れてコピーしてお送りした。私自身にもコピーを一部残してあったのを今探したが、見つからない。

論文はその頃一応目を通した。その後もう一度、ドイツから引き上げる時一万部ほどの別刷りの取捨選択のおりに見たが、むしろ解剖学的な脊髄神経系に関するものということしか覚えていない。これもうろ覚えだが、大沢先生の論文は、ドイツ領シュトラースブルクの生理学研究所から出たようだった。シュトラースブルクは、今はフランス領ストラスブールで、大学前に建つゲーテの立像は二度の大戦中も壊されなかった。ゲーテはまずライプチヒで学び、博士論文を書くべくこの大学でも学んだ。1771年8月6日博士になったと「詩と真実」には書いてある。(実は弁護士資

---

ゲッティンゲン大学医学部教授(元病態神経生理学部長)

Kohsi Takano: Minister of education and a jail.

(ehmal.), Abteilung fuer Pathoneurophysiologie, Universitaet Goettingen, Germany.

263-0005 千葉市稲毛区長沼町25-1 スマートヴィレッジ稲毛A-1104

Phone & Fax: 043-301-3236. E-mail: kohsitakano@gmail.com

格は取れたが、論文は受理されなかった。) この美しいフランスの大都市にはEU議会の議場がある。

東大二人目の日本人生理学教授は永井<sup>ひそむ</sup>潜である。永井先生はゲッティンゲン留学の私の大先輩であり、数多い日本からの生理学者のゲッティンゲン留学生第一号でもあろう。ゲッティンゲンを「月沈原」とお書きになった。

日露戦争の頃のことである。アルプスに棲む冬眠をする動物でウサギのようなムルメルチーヤ、(永井 潜先生による)の冬眠時の代謝の研究をなさっていたので、冬でも暖房なしのまま、窓をあけて日本からお持ちになったドテラを被って「今日は元日だなー」と思いながら夜を徹して実験をされていた。すると昼ごろ、マクス・フェアボルン教授が、軍籍にあった研究生を連れて突然やってきて、堅い握手とともに旅順開城の吉報をもたらされたようだ。

フェアボルンは「全か無の法則」を証明したという。彼の許には永井 潜先生の帰国後、何人も日本人が留学しているが、京都帝大の生理学教授になった石川日出鶴丸(ヒイズルマルと読むのが正しいそうだ)もその一人である。石川教授の教室の若い講師、加藤元一が北里柴三郎に抜擢されて、新設の慶応義塾大学の生理学教授になる。1923年、福岡における第2回日本生理学会で、加藤が神経伝導の活動電位不減衰を発表するや、石川は激しく反論し、ここに十年近い「減衰か不減衰か」の大論争が始まった。論争は熾烈を極め、生理学会での司会は橋田邦彦のみが可能であったと伝えられている。(加藤は、後1965年、国際生理科学連合総会の会長をつとめた)。

永井 潜先生の弟子に労働研究所初代所長の暉峻義等がいる。この研究所は倉敷紡績社長の大原孫三郎が1921年に創設した。大原美術館、大原経済研究所とともに大原孫三郎の三大快挙と言えよう。暉峻も経済研究所初代所長の森戸辰男(後文部大臣、広島大学学長)も、書籍、器械購入などを兼ねてベルリンに留学していた。1922年ゲッティンゲン大学が大戦後の経済困難から、医学古書約四千冊を売りに出した時、暉峻がこれを買求めた。そのなかにはハーヴェイの「動物の心臓と血管の運動に関する解剖学的研究」がある。当

時この初版本は全世界に48冊存在し、そのうち2冊がゲッティンゲン大学図書館にあった。今やその一冊が川崎の労働研究所の金庫にある。ゲッティンゲンに残った一冊は1945年に疎開先で水害にあって喪失したという。今は、大学250年祭に千葉大学から寄贈された翻刻版があるのみである。(大学図書館にはマルティン・ルッターの新約聖書の独訳初版本もあるが、これは世界遺産に指定されている) 筆者が1977年に川崎の労働研究所を訪ねたおりには、フェアボルンの蔵書が70個の段ボール箱に在中のまま積み上げられているのを見た。

永井 潜先生は、東大定年のころから千葉大学医学部で、最初の生理学、晩年は西洋医史学を東洋医史学の和田正系先生(「医界之鉄椎」の著者和田啓十郎の息子、鈴木正夫教授(後出)の同門会名簿第一号)と一週おきに講義をされた。鈴木先生の姻戚であったので、講義のあとで鈴木先生宅に泊まり、お二人でお酒を召されるのが常であった。

永井 潜先生のことはゲッティンゲンの家でもお名前が上がった。台湾のアマガサヘビの毒素成分であるアルファ・ブンガロトキシンが、アセチルヒョリン・レセプターをブロックすることの発見で、世界的に有名な台湾国立大学の李沈源先生(後1990年まで台湾建國党首任首席)をゲッティンゲンの我が家にお招きした折に

「永井先生には一年違いで習うことができませんでした。私たちは“長居せん”と言ったものです。」

と仰った。永井先生は東大教授になられる前に台北帝大、続いて京城帝大の教授もされた、と聞いている。余談：わが娘たちの言によれば、李先生ご夫妻はその時までには我が家を訪れた人のなかで一番美しい日本語を話された。

## (二) エッスリンゲンのザーレム介護ホーム

橋田邦彦は東京大学で日本人として三番目の生理学教授である。橋田先生は大学卒業後、大沢教授の生理学教室に入室し、1914年3月、ドイツ領シュトラースブルク大学のギルデマイスター教授の下に留学された。ところが、7月に第一次世界

大戦が勃発したので、橋田先生は敵国人としてシュトラースブルクで捕えられ、南ドイツ、エスリンゲンの留置場の独房に入れられた。外から二重に鍵をかけられ、トイレの掃除をさせられたり、食事も水スープ(Wassersuppe)と言う有様であった。第一高等学校入学以来、医学部でも同級であった解剖学の西 成甫は、橋田と同じ頃、ハイデルベルクに留学して、同地で幽囚の身となった。その二人には文通は許されていた。そのあて先、差出人の名前の前にはProf. von Hashidaと書いてきてから待遇ががらりと変わったとか(vonは貴族の名前につく)。

(周知のごとく、主として青島で捕らえられたドイツ兵は、日本の収容所で優遇されて、ドイツ菓子の焼き方を日本人に教えたりした。徳島ではベートーヴェンの第9交響曲の、もちろん女声無しだが、演奏会を開いたという)

エスリンゲンはネッカー川河畔にある千二百年以上の歴史を持つ美しい小都市である。(ローマ時代、BC3 - 4世紀の文献にも記されていたという)ネッカー川のずっと下流にハイデルベルクがある。私は2009年夏、橋田先生が捕らえられていたという建物を見たいと思った。町の観光案内で聞いてみると、この町には刑務所なんか無いと言う。警察署に行けばわかるかと思い警察を訪ねることにした。警察署の入り口に通りがかった私ほどの老紳士に尋ねると、「若い頃には町のどこかに刑務所はあったが、私は“入ったことが無い”のでどこにあったかわからない」と笑って答えた。

「警察で聞くより、市の文書館で聞いてごらん」と言う。

12世紀に建てられたという古い建物に通ずる真に細い、人がやっとすれ違うことができるくらいの、小川の上の石垣の壁を伝って市の文書館に辿り着いた。

外観はまことに古い、中は近代的でコンピューターがずらりと並んで、市民が調べ物をしている。事務の婦人に尋ねると、大分待たされた。ずいぶん調べたが、留置所の書類はここにはない、という。しかし、1959年の留置所の写真の1963年9月7日のエスリンガー日報のコピーをもってきてくれた。

新聞の大きな見出しは

「エスリンゲンの‘クリミナル’の使命は終わった」

とある。‘クリミナル’というのはもちろん正式の名前ではなくて、土地の人々の言う通称、あだ名である。現在は昔の何時の頃にか使われていたように、「ザーレム介護ホーム」と呼ばれている。新聞には1958年の水利権の書類のほか、カピネ版くらの写真が二枚。一枚は19世紀末の留置所としての外観。二枚目の写真は、美しいゴシック建築の入り口の扉にある中庭であるが、その一部には1866年まで使われていたと言う断頭台のあった場所も示されている。58人の常在留置人と一時的短期教育収監78人の収容能力があったという。しかし最近は囚人も少なく、とても旧式で経済的にも成り立たぬというので、州都ステュットガルトに800人収容可能の近代的留置所ができた機会に、当留置所は閉鎖になったということである。

かつてのクリミナルを訪れてみると、市の案内書にあるように、ザーレム介護ホームは美しく、どっしりとしている。13世紀にはすでに建っていて、中世には現在よりも一階高かったという。800年の歴史の間色々な機能をはたした。1548年には皇帝カルルスV世も滞在したという。エスリンゲンはワインの集散地でもあったので相当期間ワインの貯蔵所でもあった。今は最終的に1997年の修復の後、書籍特に児童書の博物館になっている。

(エスリンゲンではドイツで最初の発泡酒が製造された。聞いたか読んだか定かではないが、19世紀から20世紀前半に薬理学、生理学の実験にキモグラフィオンが使われたが、この円筒に当初は、この発泡酒のびんが使われたという。1850年にヘルムホルツが初めてカエルの下肢神経の伝導速度を測った。その時使った円筒がエスリンゲンの発泡酒のびんだったかもしれない)。

翌日はステュットガルトの文書館を訪ねた。エスリンゲンの駅の列車時刻表には「ステュットガルト行き」とある列車は二つしかない。そんな筈は無いと思い、プラットフォームにあがってそこに立っていた私と同年くらいの婦人に尋ねると、「私も町まで行くから一緒に行きましょう。」と言ってくれた。話してみると、1950年代には市役

所に勤務していて、刑務所に関する仕事もあったので、週に一日くらい書類をとり、市役所から200メートルくらいの刑務所に通っていたという。文書館の場所も教えてくれた。

ステュットガルト中央駅の近くにはオペラハウス、国立劇場、音楽大学、文書館など立派な新しい建物が並んでいる。1963年に私がこの町を訪れたときにはオペラハウスは瓦礫の山だった。

文書館では、

「エスリンゲンの刑務所に第一次大戦当時、日本のプロフェッサーが収容されていたのでその証拠を見たい」

と来意を告げると係員が実に親切に対応してくれた。この中から探してみたら、と言って、次からつぎにおそらく30kg位の書類を倉庫から持ってきてくれた。さすがはドイツ人、あんなに激しい戦争があったのに実に多くの文書が整然と保管されている。昼食を隣の法律に関する役所の食堂でとり、午後も古い書類と格闘していたが「橋田邦彦」も「橋田男爵」の名も発見できなかった。杉靖三郎が書いているのだから、橋田がエスリンゲンにいたことには間違いあるまい。

### (三) 科学する心

橋田邦彦先生は数カ月後（ドイツ）国外追放となり、中立国チューリッヒに移り蛙皮の電気生理学の研究をされ、1918年、終戦を船上で聞き、帰国。ヨーロッパ留学後大沢教授の教室の助教授となり、大沢教授の没後、生理学第二講座教授に就任された（1922）。

東大生理学教授在任中は、電気生理学を教室の本流とされたことは、日本医学総会の総会演説において「被刺激性と興奮性」との題名で講演されたことで明白であろう。この演題は200年前のハラーの演題であってもおかしくない。アルブレヒト・フォン・ハラーはゲッティンゲン大学創設時の医学教授、実験生理学の祖のひとり。ハラーには、人体生理学原論8巻がある。1752年、ゲッティンゲンの学会誌に「人体の感覚性および被刺激性」という論文がある。

橋田先生は1923年に英文の生理学雑誌、The Journal of Biophysicsを刊行した。その後の変遷、

敗戦による廃刊があったが、1950年、久野 寧によるThe Japanese Journal of Physiologyに引き継がれて、今日にいたっている。

橋田生理学教室からは、おそらく20人ほどの生理学教授が育った。（当時は医大、医学部、医専合わせても20くらいだったろう。）有名なところでは、東 龍太郎（東大薬理学教授、東京都知事、東京オリンピック会長等）、勝木保次（1973年文化勲章受賞）などがいる。伊藤正男（1996年、文化勲章受賞）は孫弟子にあたる。

「教壇に立って学生に生命に関係のある問題を講釈する者が、生命とは何かと質問されて答へ（ママ）ができないのでは、是は講釈するに値しない者である」との考えから、講義、実習、研究者のための生機学談話会を主催されたほか、定期的に生理学教室で、医道会、仏教青年会などを開かれた。橋田の言う生機学とは生理学のことである。

橋田先生の仏教に関する並々ならぬ教養と身の入れ方は、「正法眼蔵釈意」三（四）巻があることで明白であろう。ただ、橋田は「私は信者ではない」と言われたことがあるという。

先生は昭和12年（1937）に第一高等学校の校長を兼任され、さらに昭和15年（1940）には第二次近衛内閣の文部大臣に就任、第三次近衛内閣、東条内閣の文相をつとめられた。橋田文部大臣は「科学する心」ということを推称されていた。

東条首相と意見があわず（軍部は大学、専門学校の就学年限短縮と学徒出陣を実現しようとしていたことに反対されたのではなかったか。これは私の憶測）1943年に内閣からしりぞかれた。昭和20年（1945）終戦により戦争犯罪人として出頭をもとめられた時（9月14日）、お宅の玄関で自決された。

橋田先生が文部大臣であった頃、私は小学生だった。文部大臣が「科学する心」とおっしゃられたことが、私のその後の人生をきめたかと思う。橋田先生の高弟の一人が鈴木正夫先生であるから、私は橋田先生の孫弟子にあたる。

橋田邦彦先生辞世（後半）：いくそたび生まれ生まれて日の本の学びの道を護り立てなむ

## あとがき

これは、橋田文部大臣の時代なのだが、私は小学生時代の後半と中学初年級には航空機技師にあこがれたので、世界一（あるいは有数）の風洞のあったゲッティンゲンを知った。この流体力学研究所には、今でもほとんど常に日本からの留学研究者がいる。1975年、この研究所開設50周年に招待された時の私の喜びは筆紙に尽くし難い。高校から大学初年には原子物理学を志した。ゲッティンゲンは量子力学のメッカであったので、憧れの土地であった。若年の心とは無関係に生理学研究者としてゲッティンゲンに留学し、後に奉職した。ゲッティンゲンは近代実験生理学の生まれたところでもあった。大学創立時（1737）の一年前から「人体生理学」8巻の著者アルブレヒト・フォン・ハラーが医学部の教授であったことは本文でものべた。

麻酔をしても激的な運動系活動のなくなるない破傷風毒素下の標本に関心を持ち、その研究にも私が手を染めるまで、破傷風の近代的研究がA.ニコライヤーによって、ゲッティンゲンで始まったとは、知らなかった。

鈴木正夫先生の弟子になる前の学生時代、生理学とは全く無関係に、鈴木先生のお宅に三年間寄宿していた。橋田先生の父君、藤田謙造は浅田宗伯門下であった。私は学生時代、千葉大学東洋医学研究会の一員であった。

私の父は、原 三溪（富太郎）の原合名会社の社員であり、ロシア革命が始まる頃モスクワ支店にいた。支店長夫人は後の大女優東山千恵子であった。横浜は父母が家を築いた所であり、関東大震災にも遭った。母が通った横浜市立戸部小学校には私も通った。そんな運命的な土地に新設さ

れた横浜医療専門学校に奉職した。

先輩校である大阪の平成医療専門学校の故米澤貞次郎初代校長（京大名誉教授）は日本で最初のノーベル化学賞受賞（1981）の福井謙一の高弟である。ノーベル賞の対象になった「フロンティア軌道理論」の第一声は1952年、日本化学会近畿支部3月常会で米澤が行った。このように米澤先生は量子化学を専門とされていたから、いわばゲッティンゲン学派の末裔である。米澤先生が校長の姉妹校なら奉職するのに間違いが無い、と思ったものだった。何やかやと、ゲッティンゲンも横浜も私を運命の糸で導いたと思われる。

(2008年8月)

## SUMMARY

Dr. Kunihiro Hashida, went to Strassburg in Germany (now Strasbourg, France) to study neurophysiology shortly before the outbreak of the First World War. He was captured and sent to the jail in Esslingen on the Neckar. He was forced to be in very hard and dirty work. Thereafter he was transferred to Switzerland and able to study for some three years. After the end of the War he returned back to Japan and in 1922 he was appointed the third Japanese physiology professor at Tokyo University and in 1937 the director of Daiichi Kotogakko (the 1. national high school).

In 1940 he was appointed as Minister of Culture and Education. In 1943 he was discharged from the minister by the Prime Minister Tojo, because he could hardly accepted and followed the policy and/or possibly philosophy of the cabinet. He committed suicide after the end of the War when US-military policemen came his home to fetch him. As neurophysiologist he could have many excellent successors such as Prof. Azuma, Prof. Katuki, Prof. Ito and Prof. Masao Suzuki. I was one of pupils of Prof. Suzuki.